

# 森田 幸子の一代記

2026年

## 第一章 幼少期・生まれ育った場所

---

(0～12歳ごろ)

宇都宮の外れに、私は昭和三十三年の春に生まれた。家の前には麦畑が広がり、春になると淡い緑が地平まで続いた。父は市役所の職員で、物静かで几帳面な人だった。日曜の朝だけ、父は私と二人で近所を散歩した。ほとんど無言だったが、道端の草花の名前をぼつりと教えてくれた。「あれがオオイヌノフグリ、あれが菜の花」という短い言葉が、今でも耳に残っている。

母は近所の評判が高く、誰かが病気だと聞けばすぐ煮物を作って持参した。三人きょうだいの真ん中だった私は、目立たない存在だったが、縁側に座って庭を眺めるのが好きだった。祖母と朝顔の数を数えながら「今日は二十三個」「昨日より五個多い」と言い合う、その他愛もない時間が好きだった。

小学校は田んぼのあぜ道を通って通った。泥だらけで帰っても翌日また同じことをした。川遊びも虫取りも、日が暮れるまで飽きなかった。本を読むのも好きで、図書

室の窓際の席がお気に入りだった。姉は成績優秀で親の期待を一身に受け、弟は末っ子として甘やかされた。私はその隙間で静かに本を読んでいた。そういう時間が、後から思えば私の根っこになっている。

中学に上がる頃、町にスーパーマーケットができた。父が冷蔵庫を買ってきた日、家族全員で白い機械を眺めた。「これからは氷屋さんに頼まなくていいのね」と母が言い、父が「そういうことだ」と答えた。時代が変わっていくことを、幼いながらに感じた瞬間だった。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

縁側で過ごすひとときのイメージ

## 第二章 学生時代

---

(12～22歳ごろ)

中学に入ると、勉強が急に面白くなった。特に数学と国語が得意で、定期試験の前はノートを何冊も使って整理した。母から受け継いだ几帳面さが、ここで初めて役に立った気がした。友だちとの放課後は、お互いの家を行き来して教え合う時間だった。「幸子ちゃんはわかりやすく教えてくれる」と言われたことが、素直にうれしかった。

高校は市内の女子高に進んだ。文化祭の準備や合唱コンクールに夢中になった三年間で、親友もここでできた。進路を考える頃、「もっと広い世界を見たい」という気持ちが強くなった。栃木を出て、違う場所で自分を試したかった。宇都宮より少し遠くへ、それが最初の冒険心だった。

短大は経済科に進んだ。家計の都合もあったし、二年間で就職できる実学が自分に合っていると思った。講義よりも簿記の実習が楽しく、数字を扱う仕事への適性を感

じた。卒業後の就職先として選んだのは埼玉の地方銀行だった。「東京ではなく埼玉」というのが当時の私らしい選択で、冒険心と慎重さが半々だった。アパートを借り、一人暮らしを始めた春の朝、鏡の前でスカーフを何度も結び直した。あの緊張と期待が混ざった感覚が、今でも懐かしい。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

## 実際の本は全6章構成です

### 第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

---

### 第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

---

### 第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

---

### 第4章 恋愛・結婚

---

### 第5章 子育て・家族

---

### 第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

---

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。